

火の用心

火災に遭った弥生住居

寒い季節は暖房を使用することが多く、また空気が乾燥するため、各地で火災が起こる時期でもあります。火災は、建物や家財道具など、人の財産をすべて焼き尽くしてしまう恐ろしいもので、冬になると例年「火の用心」が喧伝されるものの、火災は一向になくなることはありません。火災防止は人類が火を発見してから続く永遠のテーマなのでしょうか。建物の火災は、国内では縄文時代の「たてあなじゅうき」堅穴住居跡からも確認されています。火災によって炭化した建物の建築部材は、土中でも腐朽することがないため、発掘調査によって堅穴住居の中から炭化した木材や焼けた土が多く見つかることで火災による焼失住居と特定できます。

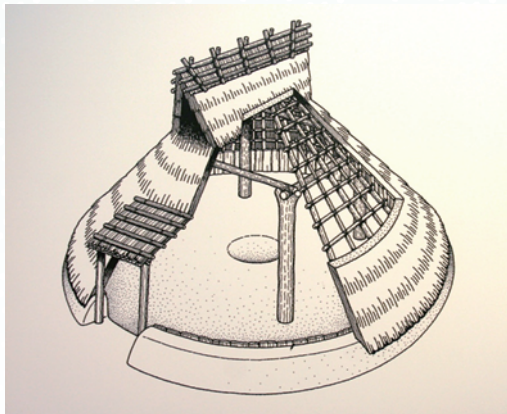
考古学の研究を行う上では、焼失住居はさまざまな成果をもたらします。焼け落ちて炭化した木材の配置によって、当時の住居がどのような木で作られていたか、そして屋根や梁の組み方などの構造を推定することができ、住居の中に残された土器や石器などの出土状況から、住居内のスペースの活用方法や生活の様子などもわかることがあります。町内でも、弥生時代の火災に遭った住居跡が発掘調査によって発見されています。竹田弥生遺跡（竹田）の弥生集落からは、昭和四十七年（一九七二）に実施した発掘調査で見つかった十五棟のうち、二棟が弥生時代後期初頭頃（約一九〇〇年前）の焼失住居でした。その一つである五号住居跡は炭化した屋根材などがよく残っていました。円形に掘られた床面の端から中心に向かって木材が



竹田弥生遺跡 5号住居跡

放射状に倒れており、屋根の構造を推定する上で貴重な資料となりました。床面からは土器片のほか、砥石、勾玉、ガラス小玉とヤリガンナなどの鉄片が数点見つかっており、装飾品でさえ持つて逃げる間もなく火が広がったのでしょうか。

もう一つの九号住居跡は、炭化材の上に火を強く受けた焼土が覆いかぶさっていました。このことから、堅穴住居の茅葺き屋根の上に土をかぶせる土屋根だったのではないかと推定されています。土屋根の存在を示す住居跡は、縄文時代からいくつか発見されており、近隣では、鳥取県米子市と大山町にまたがる妻木晩田遺跡の弥生時代住居跡でも確認されています。こうした屋根構造も焼失住居跡からわかったことです。また、杉遺跡（杉）の弥生時代中



弥生住居の復元図



杉遺跡の焼失住居跡

期中葉頃（約二一〇〇年前）の住居跡からも、大量ではありませんが、床面に木炭が散在しており、これも焼失住居の可能性にあります。床面からは土器の他に石庖丁片や糸を紡ぐ道具「紡錘車」や、石器の材料となるサヌカイトの破片が見つかり、住居内での糸紡ぎや石器作りなどの製作活動が想像できます。

焼失住居は、今となつては学術的に貴重な資料を提供していますが、やはり火災は当時の人々にとっても大きな災難であったと思います。現代に生きる私達も、火の元にはくれぐれも用心しましょう。

参考文献：『鏡野町史』考古資料編、
「杉遺跡」発掘調査報告書

生涯学習課 日下

電話(0868)54-7733